

# Apples & People

## (1) リンゴ「ふじ」育種の経緯

一般に、果樹の新しい品種を開発するには、(1) 雄しべから、花粉を異なる果樹の雌しべに授粉させて、交配することから始まり、(2) 交配で得られた果実から種子を採り、(3) その種子を植えて実生（つまり苗木）を育てます。(4) このような苗木から得られた果実について、味や形、色、貯蔵性、樹木の性質、病害虫への耐性、栽培の容易さなどの点を審査して、候補を選抜します。選抜された候補は、(5) 何年もかけて試験栽培を行い、特性を確認し、(6) 最終的に名前を付けて、品種登録します。

農林省の園芸試験場東北支場は 1938 年（昭和 13 年）3 月に青森県南津軽郡藤崎町に設立されました。その研究課題は果樹と野菜の育種におかれ、その中でもリンゴの育種は重要な課題でした。日本における当時のリンゴの品種は、「国光」と「紅玉」が主流であり、両品種の占有率は 80 パーセントに達していました。「印度」を除くリンゴの品種は、ほとんどが明治以降にアメリカから導入されたものでしたが、いずれも日本の消費者の嗜好を十分に満たすものではありませんでした。このため品種改良は日本の環境条件に適した品種を育成することが主な目的となりました。

園芸試験場東北支場で 1939 年からの 3 年間に 20 品種 64 通りを組み合わせた交配の結果得られた 13,775 個体の実生から、最終選抜には 4,656 個体の苗木が残りしました。しかし、戦時下では交配種の苗木を本格的に定植することが困難になり、リンゴの育種は事実上停止されました。「ふじ」が誕生するまでには、いくつかの危機がありましたが、これが最初のものでした。戦争が激しくなると、穀物増産の掛け声が高まり、果樹の育種は不要・不急のものとなさされるようになりました。わずかに残った職員の懸命の努力と場外の一部理解者の激励を受けて、交配種の苗木が守り抜かれたのは、ほとんど奇跡であったといえます。

戦争が終わると、園芸試験場の職員も復員し、育種が再開されました。1947 年（昭和 22 年）から、定植された 643 個体の苗木のうち 596 個体が結実を始め、交配された苗木の選抜の基礎が築かれました。しかし、選抜によって「国光」より優れた目標形質をもつ個体はなかなか得られませんでした。1951 年（昭和 26 年）に至って、「国光」と「デリシャス」の交配種の注目個体の 1 つである「ロー 628」が初めて結実し、有望個体として選抜されました。

1955 年（昭和 30 年）の秋になると、育種担当者は畑に定植された苗木のうちの 1 つの個体が品質と貯蔵性の点で特に優れていることを確信し、支場長の森英男に試食を求めました。森支場長もその優秀な品質に着目し、担当者がこの個体に特に注意を払うように指示しました。担当者のだれもがこの個体の有望なことは確信していましたが、いかにも色が青く、年によって着色の状態が不安定でした。このため、引き続き着色と貯蔵性についての検討が行われ、ようやく 1958 年（昭和 33

年) になって園芸学会春季大会で「東北7号」として発表されました。発表の直後、挿し木や接ぎ木のための穂木が系統適応性検定試験用に北日本10個所の農業試験場に配布されました。

その後、森支場長は、青森県、岩手県、長野県の熱心な農家にもこの穂木を配布し、試作を依頼しました。この中には後に「ふじの育ての親」と呼ばれる青森県の斉藤昌美氏も含まれています。

このリンゴが「ふじ」と命名され、「リンゴ農林1号」として登録されたのは1962年(昭和37年)の4月21日でした。

#### 「国光」と「デリシャス」の交配操作の経緯

花粉準備	1939年5月9~12日	「デリシャス」の花および切り枝を青森県苹果試験場から分譲してもらう。
交配	1939年5月23日	「国光×デリシャス」の交配を実施。(1)花叢(2)花交配とし、237の花叢を供試。「国光」は支場の番外1号園の樹を使用。
収穫	1939年11月2日	交配果274果を収穫し、そのまま貯蔵。
種子整理	1940年4月8日	交配種子採取、2,004粒を調整。
播種	1940年4月16日	交配種子を畦幅60cm×株間15cmに播種。
発芽調査	1940年7月28日	実生979個体の発芽を確認。
実生調査	1940年11月22日	実生968個体の獲得を確認。
仮植	1941年春	獲得実生を畦幅1m×株間30cmに植え付け。

#### (2) リンゴ「ふじ」命名の経緯

このリンゴの候補名の選定段階では研究室内で議論が沸騰したといわれていますが、最終的に、石塚昭吾技官の提案した「ふじ」を第一候補とすることに決定しました。「ふじ」という名前は、日本で生まれた世界でも第一級の品種が日本を象徴する富士山の裾野の広さにあやかって広く普及してほしいという希望や、このリンゴが生まれ育った津軽の「藤崎」の町にちなんだものという意見や、ミス日本から女優になった絶世の美女、山本富士子にあやかっては、という意見もありました。このほかに、このリンゴの販売に尽力した東京・銀座の果物店「千疋屋」の齋藤義政社長からは、「東北7号」の7という数に通じるラッキーセブンを思い起こさせる「ラッキー」という名前も提案されたそうです。さまざまな意見が提示されましたが、「ふじ」という名前に反対するものはありませんでした。

## 参考文献

土屋七郎「『ふじ』育成の経緯」 ふじ 60周年記念誌編集委員会「リンゴふじ 60周年記念出版 リンゴふじの 60年」(2000年)より